
コードネームX

双羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードネームX

【著者名】

Z0672F

【あらすじ】

「コードネームは囚われの猫、みんなこのミッションを無事終わらせるのよ。わかつたら返事。ミスしたやつは昼飯おこりだからね」いつものように俺たちはサクヤの仕切る『探偵部』で依頼が来るのを待ち続ける。猫探しや浮気調査、拳句の果てには強盗まで、くるもの拒まずの依頼請負屋。エキセントリックな力を駆使し片っ端から依頼を片付ける超人群団。高校で出会ったやつらによって俺の生活は一転。サクヤを中心に俺たちが振り回される高校生活。それも悪くはないな。どんな悩みもすつきり解消。御代はきっちり

いただきます。それが俺達『探偵部』だ。

プロローグ

トウマ君へ

久しぶりだねトウマ君。東京はまだ寒いです。奈良はまだ寒いのかな？

ちなみに私は元気でやつてるよ。お父さんは相変わらず元気。トレーニングは今でも続けてて、拳銃の腕は格段にあがったよ。今度会つたらもう一度的当て勝負しようね。

お父さんもまたトウマ君とトレーニングしたいって。

そうそう、いきなり手紙を送ったのはね、実は奈良の高校に進学することになった

からなの。

だから落ち着いたら遊びに行くね。
ではではまた近いうちに。

水樹華より

返信 ハナへ

いきなりの手紙に正直焦ったぜ。まあそれなりに元気でやつてるよ。ちなみに奈良もまだ寒い。そろそろ四冊だつて言つたのがいつになつてんだか。

次郎さんも元気みたいで何よりだ。

ボディガードの仕事はうまくいくてるようだな。

正直次郎さんのお陰でここまで強くなれた。

まあ、拳銃の扱い方まで教えてくれるとは思つてもいなかつたけどな。

六年間のトレーニングを無駄にしないよつ毎日体鍛えてるよ。

流石に拳銃は使えねえからエアーガン使つてつけどな。

ハナがこっちの高校に来るとは予想外だな。まあ引っ越ししてきたら

顔見せに来いよ。

綺麗な長い黒髪と、パツチリ垂れ目をもう一度拝みたいからな。
じやまた今度な。

追伸 携帯のアドレスと番号書いた紙一緒に入れてつから。

冬馬より

泉

プロローグ（後書き）

「こちらを覗いて頂いてありがとうございます。未熟者ですがゆっく
り書いていきます！」

コードネーム『プリズム』 1

心地よい春の風とめでたき日のために生命力の限りを燃やし、綺麗な花を満開に咲かす桜の木に見守られる中入学式を終え早四田、朝一番から騒がしい。

「何故なんだー」

教室に入るなり馬鹿の西山が頭を抱えながら俺の前まで来た。

「何だよ朝一からうるせーな」

「聞いてくれよ。隣のクラスの女子に告つたらあつさり振られちまつたんだよ」

「でさあ下北、昨日もフレッチャーがチヨー面白くて」

「つておい、無視か。無視ですか。頬むから聞いてください」

こいつの馬鹿話は長くなりそうだから無視して隣の席の下北に話をすると、以外といい突っ込みを入れてきやがった。

「しゃーねえーな。わかったよ。お前が告つたやつ見に行くぞ」

「何でそななるんですか。なぐさめてやるうとか思わないのですか。傷をさらに広げるのですか」

こいつはおちょくり甲斐がある。

「ひょっとして噂の美人に告つたの?」

不意に下北が話しに割つて入る。

「そうだよ。悪いか。だつてすげえ可愛いんだもん」

「トウマ、相手わかつた。早速見に行くよ」

相手がわかつた下北は、それを阻止しようとする西山をいなして、俺を教室から引っ張り出した。

取り残された西山は目で何かを訴えていたが、俺は笑顔でそれに答えてやると机にしあれるように突つ伏した。

ちなみにこの西山と下北は入学してすぐに意気投合した初めの友人だ。

「あの子だよ。窓際最後尾の子。少し様子が変なようだけどね」

下北が指差したほうへ目をやるとえらい美人がそこにいた。

薄い茶色に染めた肩より上で切り揃えられたショートヘアが整った顔を覆っている。そして何といつてもあのパツチリとした垂れ目が彼女の可愛さをぐつと引き立てている。西山にはもつたいたい。だが何かが引っかかる。何とも言えない違和感を感じる。

違和感を感じると言えばこの教室。何故かみんな怯えながら一点を見ている。

窓側最後尾の席をクラス全員が見ている。その視線の先にはチヨーS級美女がいる。

そして いかつい兄さん達が三人。

「下北、あれはどういうことかね」

「だから様子が変って言ったんだよ。多分あれは恐喝に近い告白を受けてるんだろう」

冷静に答える下北は哀れむような目をして彼女のほうを見ている。

「無視してんじゃねえよこの野郎」

喧騒と共にガシャンと椅子が音を立て、女の子は一人の生徒に腕を引っ張られ強制的に立ちあがらされた。

「おい下北これはまずいから先生呼んでくる」

俺は騒ぎを早く鎮めてやろうと職員室へ足を向けようとした時、一瞬彼女と目が合った。

パツチリした垂れ目。パツチリした垂れ目？

待てよ。これはもしかしてそうなのか。

もう一度確認する。やっぱり垂れ目。そして茶色の髪。あれを黒にしたら。

さっきの違和感が全てとけた。俺はあいつを知っている。もし本当にあいつだとしたら やばい。

俺は危険を察知して彼女の方へ走った。

今にも殴りかかりそうな男子生徒を彼女は無表情で見ている。席を搔き分けやつとの思いで現場に到着した俺は真っ先に女生徒を掴んでいる手を振り解いた。

「大丈夫かハナ」

「ひょっとしてトウマ君？」

この言葉で確信を得た。こいつははずつと俺のライバルだった水樹華だということを。

「お前何やってんだよ」

さつきまでハナを掴んでいた男子生徒が俺の顔面めがけて拳を振り上げた。

えっ、ちょっと、それは反則でしょと思いつながらも俺は軽くかわし、そのまま一発腹に蹴りを入れてやった。すまない、女にのされるよりは格好がつくでしょ。

加減はして蹴つたつもりだが思ったよりも効いたらしく、男子生徒は膝を床につき、腹を抱えて動かなくなつた。これで一件落着だな。はあつとため息をひとつ吐き、ハナのほうへ振り返った瞬間、ハナは俺を左手で強く弾いた。

あまりのことに俺はバランスを崩しそのまま床にお尻をついた。と同時にさつきまで立っていた残りの一人が俺の横へぶつ飛んでくる。

何じゃこりや。状況把握に少々の時間を作った。

やつちまったくなハナ。

「こいつら一人がかりでトウマ君を殴りつけたから咄嗟に……」

少しはにかんだ笑顔を俺に向ける。昔と変つてない。手加減がない所といい、その笑顔の可愛さといい全てが昔と一緒にだ。

「久々の再会がまさかこんなかたちとはな」

「笑えるね」

クラス全体がきょとんとしていた。この後どうすかなあ。考えただけで疲れるぜ。

いつの間にか三人組もいなくなつていた。
まさかハナが同じ高校とはな。まあ何がともあれ少し面白い高校生活になりそうだ。

時計は八時三十分を指しかけていた。

「やつべ、授業始まる。教室戻るわ」

「じゃ、またね」

急いで教室を出ると下北が何か怪しい笑みを浮かべて待っていた。
そしてもう一人、俺のほうを見て何か不敵な笑みを浮かべる女生徒
が、目が合った瞬間にものすごい勢いで逃げ出した。

何だあの人？

気になりつつも俺は下北から質問責めに合いながら教室へ向かつた。

思えばこの事がきっかけだったのだろう。

俺の明るい高校生活がある一人の人物によって奪い去られることとなつたのは。

「ードネーム『プリズム』 1（後書き）

作者の双葉です。お見苦しい小説ですみません！――」この流れは早く終わらせたかったので少し強引な文章になってしましました。

「コードネーム『プリズム』」2

朝のホームルームを何事もなく終え、そのまま俺たちの担任である浅田先生の国語の授業へ突入した。

授業中だと言うのに辺りの生徒は落ち着きがない。

さつきの出来事が理由だろう、授業が終われば俺はどうなつちまつんだ。めんどくせえ。

そういうえば自分のクラスで騒ぎを起こしてしまったハナはどうしてんだろう?

まあ俺は俺で自分の問題を処理しなきゃいけねえから、あいつはあいつでどうにかするだろ。

そんな混沌としたことを催眠術のような浅田の授業片手に考へてゐる間に授業終了のチャイムが鳴り響いた。

起立、礼と曰直が挨拶を済ませた瞬間、無駄だとわかりながらもひとまずトイレへ逃げ込もうとスタートダッシュを決める間もなく、右腕が進行方向と逆のほうへ引き寄せられた。

「トウマ捕獲。逃がしはしないよ」

あっさり下北によつて捕獲された。横では馬鹿の西山が不敵な笑みを浮かべてやがる。

やはり逃げ出すことは不可能か。クラス中のやつらが一いつ見ていふ。

「トウマ、さつきのこと話をしてもらおうか」

下北の質問への返答をクラス全員が注目している。もう完全にロッカされている。

仕方がない、全部話すか。

「何を話せばいいんだ」

全てをあきらめた犯罪者のように、開き直つた姿勢で言つてやつた。

「じゃあまず、隣のクラスの水樹さんとはどういう関係なの?」

「あいつは昔住んでたところの近所さんだ。だから仲はいいんだ」

「納得です。じゃなんであんなに強いの？」

「それはだな」

言葉に詰まる。本当のことを言つていいのかわからないからな。

「どうしたのかなトウマ君。理由を述べてみろよ」

西山がニヤケながら悪魔のように迫りくる。これはかなり鬱陶しい。

クラス中の視線も集まっている。

このままでは埒が明かん。

俺は下北と西山の間を割つて黒板のほうへ歩いていった。

俺とハナの関係は遅かれ早かれれるだろう。全てを話す覚悟でクラス全員が見える方を向き

全て言つてやつた。

「俺とハナは小さいころからの友達だ。ハナの父さんはボディーガードの仕事をしていて、昔から俺たちを鍛えてくれた。それが俺たちが強い理由だ。かと言つてハナを避けないでやつてくれ。それだけは頼む」

沈黙と共に冷やりとした空気がクラスを包む。教室外のざわめきが聞こえるほどだった。

しかし、その沈黙は一瞬にして切り裂かれた。

「なーんだ。そういう事か。なら納得だね。ちなみに水樹さんのことも別に避けたりしないから安心しろよ。じゃこれで質問終わりだ」下北の言葉が天使の囁きにさえ聞こえた。

「ありがとう下北。感謝してるぜ」

下北は嫌味のない笑顔を返してくれた。

クラスのやつらも納得したように各自の休み時間にとるべき行動へ移つていく。

「じゃ私水樹さんが心配だから隣のクラス行つてくる
「私も」

等という会話をえも聞こえてくる。これにて一件落着だな。

この様子だと隣のクラスも心配なさそうだな。

緊張から開放され安堵したのだろう、マラソンをさせられた後のよ

うな気だるさが体に押し寄せてきた。

疲れを癒すためゾロゾロと重い足を引きずるよつこじて自席へへたれこむ。

下北と西山も俺の席までやつて来て高校生らしく、昨日のお笑い番組の話して盛り上がった。

たわいもない談笑に盛り上がりリラックスムードを漂わせていたところ、急に下北達が黙り込み俺の背後に視線を釘付けにしている。どうしたんだ？ 気になるので背後へ首を回そうとした瞬間、俺の右手がすごい力に引き上げられ、勢いで立ち上がるせられた。

「何すんだよ急に。ビックリするじゃねえか」

相手を確認せずに怒鳴りつけた俺の前にはまたビックリするような光景が焼き付けられた。

肩ぐらいで伸びた黒いショートヘアを頭の後ろで適当に結び、パツチリ一重の意志の強そうな目をギラギラさせたこれまたビックリ美人俺の腕を引き上げている。

「急に何なんですか」

胸の学年章が緑であることを確認していた俺は、「一年生ある」とを一瞬で把握し敬語に切り替えていた。

「君、朝から楽しいものを見せてくれたじゃない。是非君と話しがしたの。放課後三階の文化教室で待ってるから来てね。来ないと罰ゲームだからね」

裏のありそうな笑顔でそれだけ言い残すと、その女子は風のようこの教室のドアまで走り去ってしまった。

「あの、ちょっと……」

「あつ、あの女の子も連れてくるのよ、いいわね

俺の話しなど一切聞くつもりもなかつたのだろう、もつもつに姿はなかつた。

「何だつたんだ今い

呆けに取られたような顔をした西山が聞いてくるが、俺にもせつぱ

りわからない。

ただ言えることはまた面倒」とが待っているところなのだ。
高校に入って早々と俺のスローライフが奪われているような気がする。

はて、どうしたものか。

放課後まで時間はたっぷりある。

二時間目の開始を伝える予鈴が鳴り、俺の憂鬱な時間がまた始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0672f/>

コードネームX

2010年10月11日05時03分発行